博士論文概要書

現代医療と生命倫理の哲学的基礎に関する考察

－「脳死・臓器移植」および「尊厳死」を事例として－

A Study of Philosophical Fundamentals of Modern Medicine and Bioethics

－as a Case of ‘Brain Death on Organ Transplantation’ and ‘Death with Dignity’－

早稲田大学大学院社会科学研究科

地球社会論専攻　社会哲学研究

外村江里奈

本論文の問題意識

近年の科学技術の発展、とりわけ過去数 10 年の生物医療科学技術 (biomedical science and technology) の急速な発展にともなって、以前は不可能であった医療行為が可能になった。たとえばそれは、出生前診断や先端生殖技術、あるいは臓器移植や胃ろう造設術などである。こうした医療技術の発展は生の可能性を拡大し、命を救うがゆえに積極的に進められる。

しかし医療技術の発展は同時に、新たな問題を生み出す。なぜなら生命科学や医療技術の発展によって、臓器の交換可能性や身体機能の再生可能性が拡大し、「生命への人為的な介入」が促進されるからである。

たとえば、1950 年代末頃から発達した人工呼吸器により出現した「脳死」は、臓器移植という目的に応じて「死の定義」が変化する、「死の判定基準」の細分化であるといえる。また「尊厳死」や「安楽死」は、一様に身体的機能の停止を引き延ばす「執拗な延命治療」に抗する要求として 1970 年代頃より出現した。

このように現在、医療における「生死の境界線」は、技術的処理の可能性という観点に大きく左右され、規定されている。つまり、よりよい生をおくるために用いられるはずの医療技術が、「生命への人為的な介入」を促進し、「生と死のゆらぎ」を惹起している。かかる矛盾による「生と死のゆらぎ」は、人間存在そのもののゆらぎである。さらにこれは、自然に対する畏怖の念をゆるがし、「生命の尊厳」の侵害をも意味する。

したがってわれわれは、「生命の本質」を見失うという「危機」に直面している。それゆえ現在、生命倫理に関する諸問題を本質的にとらえるために、全生命過程を包摂する《自然の根源的な生命の流れ》に即して「生」や「死」を問う視点が要請されている。

ところが、本来、生命あるいは生き物の倫理を問う「学」であるはずの生命倫理は、その役割りを十分に果たしてはいない。生命倫理学は 1960 年代から 1970 年代の米国で生まれたが、現在の生命倫理は、「作法」や「エチケット」という意味合いが強い。そしてそこにおける議論の重点は、社会的コンセンサスや政策的な許諾にある。そのため今日の生命倫理は「医療倫理」として、各人の個別的な状況と医療行為とを調整する機能にとどまる。ゆえに《自然の根源的な生命の流れ》という視点は考慮されていない。

本論文の目的

以上の問題意識から本論文の目的は、社会哲学の視座から現代医療や生命倫理のあり方を問い直し、《自然の根源的な生命の流れ》に根ざした人間のあり方を探ることである。とくに、われわれの日常生活をも規定している近代的な思考枠組みを社会哲学の視座から検討し、生命倫理をめぐる諸問題を通じて、他者との関係性や社会のあり方を問い直すことである。

本論文の課題と方法

本論文の課題は、まず、現代社会が直面する「危機」、すなわち「生命の本質」を見失うという「危機」の意味を社会哲学の視座から多角的に把握し、それを根本的に解明することである。つぎに、明らかにされた「危機」を転換する方途を探ることである。

第一に、一定の枠組みで覆われた社会のあるがままの姿を洞察し、そのあり方を多角的に検討する。これは、社会現象すなわち「事実」の因果論的把握を意味する。

第二に、他者や世界との関係性の現われである意味の構成過程とその基底との関係性を明らかにする。そしてそれによって、「いのち」をめぐる「出来事」に立ち現れる「倫理それ自体」の生成過程を問い直す。これは、事実と問題に即して、「現象の学」および「形而上学」によって捉えた「意味連関」にもとづいて、社会現象を多角的に把握することを意味する。

第三に、第一と第二の考察によって把握した「危機」を転換するために、社会哲学的基礎づけのもと、現代医療や生命倫理のパラダイムを転換する道筋を提示する。

以上のように本論文においては、既存の生命倫理を自明の前提とするのではなく、その自明性こそを問い、日常における「いのち」そのもののあり方を再考することが目指される。したがって本論文の試みは、社会における意味の構成と、意味の生成や構成を可能にする基盤の解明という根源的な次元へ至る問いを意味する。

以上の課題は、とりわけ脳死・臓器移植および延命治療と尊厳死・安楽死をめぐる問題を通じて、以下のように事例研究と理論的考察の二つの側面から検討する。

第１章において、脳死・臓器移植および延命治療と尊厳死・安楽死の現状の分析をし、現代医療と生命倫理の問題点を明らかにする。そして、それにもとづいて問題提起を行う。

第２章では、第１節において現代医療や生命倫理の背景にある思想や人間観を確認する。つづいて第２節と第３節において、近代的な思考枠組みの本源を明らかにし、それを解体する契機を、フッサール (Edmund Husserl 1859-1938) とクザーヌス (Nicolaus Cusanus 1401-1464) の思想より検討する。

第３章および第４章において、フッサールとハイデガー (Martin Heidegger 1889-1976) およびクザーヌスの思想を通じた理論的考察を行う。その際のおもな論点は、世界の相依相属的な関係性と人間の「主体性」、また、意味の生成や構成を担う人間と世界の関係性、およびその基盤としての《自然の根源的な生命》との関係についてである。

最後に第５章において、事例研究を通じて明らかになった問題点を、これまでの理論的考察にもとづいて、あらためて社会哲学的に基礎づける。

本論文の意義および論文の構成

本論文の意義は、社会哲学の視座から、社会における医療のあり方や医療倫理化した従来の生命倫理を再考し、生命倫理における新たな視座の獲得ができるという点である。

さらに、N・クザーヌスの思想とE・フッサールおよびM・ハイデガーの思想の差異と類似性を検討することによって、三者の思想の現代的な意義を明らかにし、西洋哲学史における貢献を明示することができるという点である。

目次

序文
第１章　生命倫理と「生と死のゆらぎ」
　第１節　生命の客体化と形式化
　　第１項　脳死と結合した臓器移植
　　第２項　延命治療と各国における尊厳死・安楽死の動向
　　第３項　生命の商品化――身体の「モノ」化と交換可能性の拡大
　第２節　生命倫理の医療倫理化
　　第１項　生命の数量化と意味の軽視
　　第２項　生命倫理の基本原則について
　　第３項　自己決定をめぐる問題点
　第３節　生命倫理の限界と社会哲学の要請
　　第１項　近代的倫理観の特徴
　　第２項　現代医療と生命倫理の弊害
　　第３項　生命倫理の再考へ

第２章　現代医療と生命倫理に関する哲学的視座――その予備的考察
　第１節　現代医療における近代的認識枠組み
　　第１項　形式的合理性と「認識の貧困化」
　　第２項　近代的人間観の諸相
　　第３項　現代医療の背景にある機械論的心身二元論
　第２節　現象学的アプローチの特徴――近代的認識枠組みの解体
　　第１項　自明性への問いと超越論的現象学
　　第２項　近代科学の思考原理と「理念化」による二重の危機
　　第３項　「知のパースペクティヴ性」と脳死・臓器移植の意味
　第３節　「認識枠組み」自体の再考――クザーヌス哲学に関連して
　　第１項　哲学史におけるクザーヌス
　　第２項　クザーヌスの認識論――測定と「臆測の術」
　　第３項　感性・悟性・理性――認識の成立根拠

第３章　クザーヌス哲学の再検討――人間の知の有限性をめぐって
第１節　「知の原理」と「実在の原理」
第１項　クザーヌス哲学の基底――「反対・対立の合致」と「知ある無知」
第２項　「類似化」による認識
第３項　クザーヌスの「神」と知の有限性
第２節　「世界＝宇宙」の存在様相――クザーヌスのコスモロジー
第１項　「縮限」概念について
第２項　「世界＝宇宙」の対象化――ハイデガー『世界像の時代』から
第３項　「世界＝宇宙」と個物の関係について
第３節　「実在の原理」と他者の要請
第１項　「世界＝宇宙」の重層性とその意味
第２項　「真理」の分有とその認識
第３項　「真理」の希求と他者の介在――知と実在の交差

第４章　意味世界とその根拠――「主体性」をめぐる現象学的視座
第１節　近代的人間観の再考――クザーヌス哲学の現代的意義
第１項　人間の「主体化」――近代的ヒューマニズムの成立
第２項　「視点」の確立――宇宙像の転換を契機として
第３項　「世界＝宇宙」の調和性と「ミクロコスモス」としての人間
第２節　意味・身体・他者――フッサール現象学の射程
第１項　「意味」としての世界と身体の役割
第２項　世界の受容と自他の等根源性
第３項　不可視なものの顕れとしての「意味連関」
第３節　「真理」を開示する技術と人間の役割――ハイデガーの技術論をてがかりに
第１項　技術の本質と人間の知性
第２項　近代技術における「真なるもの」と「真らしきもの」の混同
第３項　「人間存在の危機」と現代医療の根本問題

第５章　生命倫理を超えて――QOL、SOL 概念の再考を通じて
第１節　物語としての「生命の質（QOL）」
第１項　「延命」の自明視と現象学的時間論
第２項　「生き生きした時間」と「生命の質」
第３項　意味論から見た緩和ケア――医療を超えた「価値共有の場」
第２節　「生命の尊厳（SOL）」の哲学的基礎づけ
第１項　「人間の尊厳」に関する諸見解
第２項　生命の尊厳と贈与――臓器移植の倫理観をめぐって
第３項　「自然の根源的な生命」という視座
第３節　日常における「いのち」の再考
第１項　「いのち」の本質的契機としての死
第２項　「人間の尊厳」の在り処
第３項　生命の結晶化とその輝き――他者と死とともにある生
結語

本論文の全体の構成は以下のとおりである。

序文

序文において、本論文の問題意識や目的、さらに論文の構成と課題に対するアプローチ方法が示される。

第１章　生命倫理と「生と死のゆらぎ」

第１章においては、現代医療と生命倫理に通底する近代的な思考枠組みを検討し、その限界を明らかにする。そして本考察にもとづいて問題提起を行い、本論文の課題を明確にする。

第一に、客体化と形式化という観点から、現代医療における生と死の現状を分析する。具体的には、まず「脳死・臓器移植」および「延命治療」と「尊厳死」、「安楽死」をめぐる生と死の現状を分析する。この現状分析から、医療において、「生と死の境界線」が技術的処理の可能性によって規定され、「生命への人為的な介入」が促進している点が明らかになる。つぎに、生命の客体化と形式化の象徴的な事例として、身体の商品化現象を検討する。ここでは、生命科学技術の急速な発展と新自由主義的な市場原理とが結合して、「生命の商品化」現象を惹起していることを指摘する。

第二に、生命倫理の基本原則を概観し、個人主義的自由主義にもとづく生命倫理の問題点を明らかにする。その際は、自己決定をめぐる問題点を中心に検討する。またここでは、今日の医療や生命倫理のパラダイムによる本質的な弊害を検討するために、現代医療と生命倫理の背景にある近代的倫理観を確認する。

以上の本章の考察から、以下の点を問題提起する。生と死の医療化によって「生命の人為的介入」が促進し、「生と死のゆらぎ」が惹起されている点である。そしてこの「生と死のゆらぎ」こそが、人間存在の「危機」のみならず、人間存在の基底である「自然全体の生命」の「危機」であるという点である。

第２章　現代医療と生命倫理に関する哲学的視座――その予備的考察

第２章の目的は、第１章で明らかになった「危機」を根本的に解明し、現代医療や生命倫理における支配的なパラダイムを転換するための基礎的な考察を行うことである。

なお前述のとおり、第２章第２項から第４章にかけては、フッサールとハイデガーの思想をてがかりに近代の特質を解明し、さらに近代の認識枠組みを転換するために、クザーヌス哲学の再検討を中心に考察する。

第２章においては、第一に、現代医療における認識枠組みを検討し、その背景を確認する。とくに、M・ウェーバー (Max Weber 1864-1920) がとらえた「形式的合理性」と「実質的合理性」に着目し、生と死の医療化を促進した科学的・合理的な思考と「認識の貧困化」について検討する。ここで明らかになるのは、次の点である。すなわち現代医療においては、目的に対する手段の合理化であるところの没価値的な「形式的合理性」が追求され、それが「価値判断」に影響を及ぼしているという点である。

このような現代医療における「認識の貧困化」および、その思考枠組みを本質的に理解するために、本章の第１節では、科学的・合理的な認識にもとづいて形成された人間観の特徴や、現代医療の背景にある機械論的心身二元論について検討する。それは、人間理性の絶対化、欲望追求の自由による「無限への衝動」、さらに数量主義などによって形成された近代的な人間観である。

第二に、事象や現象の背後関係にある「意味連関」を捉えるために、フッサールの現象学とクザーヌスの哲学に依拠して、意識作用および認識の本質的な働きを確認する。とくにフッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』を中心に、近代科学の思考原理の本源を反省的に考察し、意識の逆説的な働きによって視点が獲得する「知のパースペクティヴ性」という射映性を明らかにする。さらに、それによって脳死・臓器移植の背後にある「意味」を捉え、現象学的アプローチの意義を明示する。

第三に、前述のフッサールにおける「知のパースペクティヴ性」を、クザーヌスの思想に遡って検討し、「測る」という人間の認識の基本的な作用を考察する。そして、認識における知性すなわち、感性、悟性、理性の総合的な働きを明らかにし、ここに、分析的・合理的な悟性認識を偏重する近代特有の思考を反省する契機を見出す。

本論文が以上のように、フッサールとクザーヌスの思想に遡って、現代医療や生命倫理の問題を検討する理由は、以下の点にその反省の契機が見出せると考えられるからである。

すなわち、フッサールが、科学技術の発展にともなって、実証科学的な認識が日常生活をも規定している点を問題視し、認識における意識作用を解明した点である。

また近代的思考の萌芽といわれるクザーヌスの思想において、先述の科学的・合理的な認識と相違する知の働きが考究されている点である。以上の点をふまえて、「測る」という人間の認識の基本的な作用に着目し、近代科学の思考原理および、それを相対化する認識の本質的な働きを考察する。

第３章　クザーヌス哲学の再検討――人間の知の有限性をめぐって

以上の第２章の考察にもとづいて、第３章は、クザーヌス哲学の再検討を中心に行う。まず、ハイデガーの思想をてがかりに、近代的主体性の本質を解明する。さらにそれを反省し、現代医療や生命倫理のパラダイムを根本的に転換するために、クザーヌス哲学を検討する。

ここで、ハイデガーとクザーヌスの思想に依拠した理由は、以下の点にある。すなわちハイデガーが、近代の認識枠組みと人間存在のあり方を反省し、本来的な人間のあり方を探求し続けたという点である。またクザーヌスが、中世と近代のあいだに立ち人間の知の限界と存在としての可能性を明らかにしたという点である。

このような点をふまえて本章の考察を通じて、前章であげた「知のパースペクティヴ性」の所以と、現象を現象として成立させる意識の働きを、より本質的に理解することを目指す。

第３章においては、第一に、クザーヌスの思想において基礎的な概念である「知ある無知」や「反対・対立の合致」に依拠して、世界の重層的な関係性にもとづく「知の原理」と「実在の原理」を検討する。そこにおける焦点は、世界と人間の関係性、個物と個物の関係性という点から、知性の特質と人間の本来的な存在様式を確認することである。

第二に、世界像の出来に関連する人間の主体性について、ハイデガーの『世界像の時代』をてがかりに近代における主体性の特質を確認する。ハイデガーによれば、近代の本質は、人間の主体化であり、それは「世界が像となること」と「人間が主観となること」によって規定される。そしてこのように世界を「像」としてとらえる視点は、クザーヌスに端緒がある。それゆえ本論文は、近代の主体性に代わる視座を提示しうるクザーヌスの「縮限」という概念に着目し、そこに近代における「人間理性の絶対化」や「人間中心主義」を反省する契機を見出す。

第三に、上記の点を詳細に検討するために、クザーヌスの「縮限」概念から世界の重層的な相依相属関係を明らかにし、世界を成立させる根拠との関わりから人間の本質的なあり方を検討する。そこで明示されるのは、人間の認識能力の限界と、あらゆる存在と関わりながら「真理」を志向して生きる人間の存在としての可能性である。ここに、現代医療や生命倫理のパラダイムを転換する方向性が示される。

第４章　意味世界とその根拠――「主体性」をめぐる現象学的視座

第４章においては、第３章の「主体性」の検討をふまえて、真理を開示する人間の役割りをあらためて検討する。

これまでの考察および本章を通じて、人間と世界の関係性、およびその基底である《自然の根源的な生命》との関係性という点から明らかになる人間の役割りは、以下のとおりである。すなわち、「知のパースペクティヴ性」を有する人間は、「ミクロコスモス」として宇宙の二つの行為を同時に担う存在であるということである。そしてそれは、人間の〈知といのちの行為〉が、《自然の根源的な生命の流れ》と「世界の意味連関の持続」とを、世界とともに巡らせるという宇宙の行為をも意味する。

人間は一方で、《自然の根源的な生命》を根拠として、「いま、ここ」において「存在―非存在」、「意味―非意味」、「生成―消滅」などあらゆるものを含蓄して現出している。他方で人間は時空間にもとづき、世界の知の運動とともに、「意味連関の持続」である「意

味をおびた世界」を現出させなければならない。

このように人間は、《自然の根源的な生命の流れ》のなかに在り、あらゆる存在を意味世界に取り込んで「いのち」という意味を展開している。したがって、意味世界と《自然の根源的な生命の流れ》は、その層は相違するものの、無縁であることはありえない。

第４章では、以上の点をクザーヌスのコスモロジーにもとづいて、全生命過程の一部として存在する人間のあり方を問い直す。その際は、「宇宙像の転換」を導いた近代的ヒューマニズムとクザーヌスの思想の比較検討から、人間の「主体性」を再考する。

さらに、《自然の根源的な生命》という基底を根拠に展開される意味世界の様相を、フッサールの思想から検討する。そこで明らかになるのは、人間は、自我意識や認識作用、あるいは身体の運動性以前に、〈すでにいつも〉世界のありとあらゆる関係性のうちに存在するという根源的事実である。

そして本章のさいごに、ハイデガーの『技術論』をてがかりに、現代医療や技術の根本的な問題と、そこにおける人間存在の「危機」を明らかにする。ここでは近代技術において、「真理」と「社会的に正当とみなされているもの」が混同され、人間自身がその存在の本質を見失うという「危機」が露呈される。それはハイデガーによれば、「真理」との断絶をも意味する「危機」である。

ハイデガーの技術をめぐる洞察は、「生命の本質」を見失うという現代社会における「危機」を見抜くものである。すなわち今日のわれわれの「危機」は、第一に、一元的な思考の上で二律背反に陥り、思考が制限されることである。たとえば、〈他者の臓器を移植しなければ、生き長らえられない〉、あるいは〈尊厳を保つためには死ぬよりほかない〉というようにである。第二に、そのように思考が制限される事態に対して、気づくことができず、問い自体を忘却するということである。

こうした「危機」は、第２章で考察するフッサールがとらえた「理念化」による「二重の危機」とも重なり合うものである。それは、人間が記号的・数学的理論という「理念の衣」に覆われており、科学的な世界こそが「真に客観的な」唯一の世界であると思い込むことよって惹起される「危機」である。同時にこれは、あらゆる方法に対して、意味付与を問題にすべきであるが、その問い自体を喪失している人間の「危機」である。

さらに、以上のような「危機」の意味を解明する本論文の課題を通じて、「危機の本質」が明示される。すなわち「危機」とは、それを転換する分岐点であるということである。そして、現代医療や生命倫理のパラダイムを転換するために、われわれ自身の思考枠組みを解体してゆく試みが、第５章で遂行される。

第５章　生命倫理を超えて——QOL、SOL 概念の再考を通じて

第５章の目的は、事例研究を通じて明らかになった問題点を、これまでの理論的考察にもとづいて、あらためて社会哲学的に基礎づけることである。

とくに「生命の質（QOL：Quality of Life)」および「生命の尊厳（SOL：Sanctity of Life）」概念の再考を通じて、以下の点から日常における生命の本質的なあり方を提示する。第一に、他者との関係性および、その基底である《自然の根源的な生命》との関係という点である。第二に、〈生の一部としての死、死があるゆえの生〉という「生命の本質」とその契機としての死という点である。

第５章では、第一に、QOL を再構成する視座を提示する。とくに、現象学的時間論から内在的な時間意識を明らかにし、「いのち」という時間を他者とともに織り成すという物語としての生命のあり方を検討する。そして、次のことを主張する。

つまり、QOL の構成要素として、〈人生において生と死をいかにとらえ、他者と共にどのように意味連関を織り成そうとしているか〉という点を含む必要があるということである。以上の主張から本論文では、緩和ケアを事例として取り上げ、医療を超えた「価値の共有の場」の重要性を示す。

第二に、「生命の尊厳」という視点から、尊厳の本意を明らかにする。とくに、脳死・臓器移植における生命の自己所有をめぐる事例を通じて、「人間の尊厳」と「生命の尊厳」について検討する。そして、《自然の根源的な生命》にもとづく各人の代替不可能性という尊厳の本意を明らかにする。すなわちそれは、〈人間自体の価値は計量できず、各人は相互に置き換えられない存在である〉という〈かけがえのなさ〉である。こうした考察を通じて、第１章で問題提起した「生命の手段化」を解体する視座が提示される。

第三に、日常の意味世界における生命のあり方を再考し、そこにおける自明性を問い直す。その際は、「人工呼吸器取り外し事件」（2006 年 3 月 25 日）という尊厳死事件を事例として取り上げ、「いのち」の本質的契機としての死を検討する。ここで検討する点は、〈生の一部としての死、死があるゆえの生〉という生命の本質的あり方および、他者とともにある生と死という日常の「生」のあり方である。

以上のように本章では、QOL と SOL 概念の再考を通じて、「生命の質」と「生命の尊厳」の本来の意味を明確にし、その再構成を試みる。それは一回性・唯一性というかけがえのない「いのち」を、自身の生と死としてさずかり、他者とともに「いま、ここ」を生ききるという「生命の質」である。また、それは、他者との関わり合いのなかで、豊かな「いま、ここ」を生ききるさなかに生起する「生命の尊厳」である。

以上、本論考を通じて次の点が明らかになる。すなわち、あらゆる存在は、「存在―非存在」を超えたいずれのものでもない、という根拠によって存在するということである。さらに、あらゆる関係性においてのみ、一回的な私「があり」、唯一的な私「であり」、固有な私「として」在るということである。

このように人間は、自身によっては存在しえず、他者によって自身を認識するという根源的受動性によって生かされて在る。こうした根源的受動性によって各人は、限りある生と死を他者とともに生きることにおいて「尊厳」を見出すことが可能である。

結語

そしてさいごに、本論考の全体を振り返り、あらためて現代医療や生命倫理のパラダイム転換の方位、すなわち日常における「いのち」のあり方を提示する。

以上が、本論文の概要である。